

全 博 協
研 究 紀 要

第 1 3 号

2010年度

全国大学博物館学講座協議会

目 次

平成 21 年度文部科学省「組織的な大学院教育改革推進プログラム」採択に伴う 大学院授業としての「博物館学専門・特殊実習」について —情報伝達具の製作—	落合知子・小島有紀子・野中優子・大貫涼子 渡邊亜祐香・辻夏奈子・水谷円香・田島太良	1
学芸員課程履修学生の常識度 —教員が示すべき知識軸—		宇仁 義和 11
地方博物館の評論とその教材化		宇仁 義和 23
全国大学博物館学講座協議会・文献目録		37

平成 21 年度文部科学省「組織的な大学院教育改革推進プログラム」採択に伴う 大学院授業としての「博物館学専門・特殊実習」について

— 情報伝達具の製作 —

落合知子、小島有紀子、野中優子、大貫涼子、
渡邊亜祐香、辻夏奈子、水谷円香、田島太良

GP 採択の経緯

國學院大学大学院では、高度博物館学教育プログラムが平成 21 年度文部科学省「組織的な大学院教育改革推進プログラム」に採択され、文学研究科史学専攻に新たに「博物館学コース」が設立された。國學院大学博物館学講座は、昭和 33 年に樋口清之博士によって全国で 3 番目に開講されて以来、本年で 52 年目を迎え、現在は青木豊教授のもと、博物館学コースに学ぶ研究生も 30 名を超え、毎年博物館学を学ぶ目的で国内はもとより、海外からの受験生も増加し、國學院大学内でも最も大所帯の研究室となっている。これまでの学芸員有資格者の輩出は 6500 人以上を数え、我が国の博物館界でも最多の数を誇っていることも一つ起因していると考ええる。

平成 24 年度の学芸員資格課程カリキュラムの改正により、学芸員養成の資質の向上が図られることは周知の通りであるが、國學院大学大学院では本 GP 採択により、さらなる博物館学教育の充実を図ることが可能となったのである。また、本プログラムの拠点を担う博物館学教育研究情報センターを研究開発推進機構内に新設し、海外博物館との共同調査、インターンシップ、神社博物館や学校附属博物館との連携等の業務を遂行している。

本プログラムの目的は、博物館学に関する大学教育に携わることができる研究教育者、および高度な博物館学の知識・技能を有する上級学芸員の養成である。その特質は、博物館学コースを中核として文学研究科各専攻が培ってきた専門分野を組み合わせることにより、専門性・学際性を兼備した博物館学研究者を養成することである。また、博物館関連企業との連携や、東京国立博物館をはじめとする各種博物館へのインターンシップを行ない、学芸員としてのコーディネート能力や実務経験を高めている。

更に特徴的なことは、複専修制度である。文学研究科史学専攻を主軸として、文学専攻、神道・宗教学専攻の計 3 専攻において主専攻と併行して博物館学を履修することが可能となっている。修了時には本学独自の資格である「國學院ミュージアム・アドミニストレーター」及び「國學院ミュージアム・キュレーター」が授与される。

國學院大学大学院博物館学専門・特殊実習の概要

博物館学専門・特殊実習は本プログラムの主軸を成す科目であり、本学大学院での授業としてははじめての講座である。大学院開講講座の必修科目として博士課程前期に博物館学専門実習 4 単位（学内外での通年インターンシップ 1 単位、夏期集中学外実習 1 単位を含む）と博士課程後期に博物館学特殊実習 4 単位（国内外でのインターンシップ 1 単位、夏期集中学外実習 1 単位を含む）の履修が定められている。本年度

のインターンシップは、国内は丹青研究所、トータルメディア開発研究所、東京国立博物館、廣池千九郎記念館に其々15日間、國學院大学研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター資料館に年間30日間、国外は大韓民国釜山広域市立博物館及び中華人民共和国西安于右任故居記念館に各1ヶ月間に亘り多くの院生が研修を積んできた。夏期集中学外実習は、長野県下高井郡木島平村の民俗資料の調査、熊本県球磨郡水上村市房山神宮社の神社資料の調査に各一週間の研修を行なった。大学院の授業においては、これら実習のデータ作成、資料の修復等を継続している。

本稿は、兵庫県加古川市に所在する加古川総合文化センターの協力依頼を受けて、授業の中で大学院生が制作した情報伝達具について、その成果報告をするものである。加古川総合文化センターは図書館、プラネタリウム、科学館などとの複合施設であり、さらに小学校の近くに立地していることから、子どもの入館者を増やすことを先ず目標とし、子どもを対象とした「漫画パネル」「解説シート」「ミュージアムワークシート」の制作に取り組んだ。小説が駆逐され、漫画が蔓延った現代社会において、文字とグラフィック媒体の両方を兼ねたものが漫画であり、その漫画を博物館展示に組み込むことで博物館への誘引の手段としたものである。

加古川総合文化センターの展示資料は優秀な資料であるにもかかわらず、提示型展示に始終していることから、その資料が有する情報を発信していないのが現状となっている。つまり単に置いてあるだけの美術館型展示になっており、加古川の歴史・風土・民俗等を学ぶ場にはなっていないといえる。

先ず、入口にミュージアムワークシートを設えて、子どもたちがそれを手にして、答えは展示の中から探していく。おのずと展示を熟覧することに繋がっていくことは言うまでもない。回答を見出す資料には解説シートと漫画パネルを設置しておく。すべてが漫画による解説となっている。これらの情報伝達具3種を作成することを課題とし、大学院生が3ヶ月に亘って取り組んだものである。

このような実習内容は、全国でも取り入れている大学はなく、博物館展示を考える能力・技術の向上、資料分析、博物館経営等を身に付ける有意義な実習と考えている。今後の博物館学実習の一つの指針となるものと確信するものである。当然のことながら、資料を熟知することからはじまり、チームワークとしての協調性も必要とされる。以下、院生による報告とする。

(落合知子)

*「高度博物館学教育プログラム」の詳細は國學院大学 HPにてご覧いただけます。
(國學院大学公式 HP→<http://www2.kokugakuin.ac.jp/museum/>)

提示と説示：説示型展示の必要性

博物館展示における「提示」と「説示」は展示意図の分類の為に使用された用語で、この用語を博物館展示学のなかで初めて使用したのは新井重三である。新井は「博物館における展示とは展示資料（もの）を用いて、ある意図のもとにその価値を提示（Presentation）するとともに展示企画者の考えや主張を表現・説示（Interpretation）することにより、広く一般市民に対して感動と理解・発見と探究の空間を構築する行為」⁽ⁱ⁾と博物館展示の理念を述べている。この分類に対し青木は、提示型展示は「鑑賞展示」であり、説示型展示は「学術解説展示」であるとしている。⁽ⁱⁱ⁾

博物館機能のひとつである「展示」は、博物館学において博物館側と来館者を結ぶ最大のコミュニケーション「資料を媒体とした情報の伝達手段」⁽ⁱⁱⁱ⁾であり、「展示こそが博物館における教育形態」^(iv)と明確な展示理念が示されている。博物館が社会教育機関としての役割を果たすには、来館者や観覧者との最大のコミュニケーションである「展示」に、その社会教育の役割の大部分が求められる。その役割とは資料と展示手法による情報の伝達が、展示者側の意図に沿って行われることに尽きるのである。

提示型展示が行われる資料には、主に美術資料などが挙げられる。美術資料は製作の段階で、「見る」「見られる」ことを意図して作られた資料であり、資料そのものみの提示型展示であっても美術資料としての価値は損なわれない。多くの美術館・美術系博物館、美術資料に見られる展示方法である。

反対に説示型展示を必要とする資料とは「見せることを目的とせずに製作された資料」つまり、歴史資料・考古資料・民俗資料・自然史系の資料などが挙げられる。見せることを目的としない性質の資料は、資料そのものみでは資料情報を伝達することは難しい。学芸員による研究の成果があり、その学術成果を展示に反映し、その資料がその時代や文化でどのような役割をしていたのか、またどのように使用されていたのか、日本の歴史においてどのような価値を持っていたのかといった事を資料の展示で伝達しなければならないのである。昨今の博物館展示は、見せることを目的としない性質の資料の展示でも提示型展示が散見され、資料情報の伝達が少ないままの展示が多く行われている。その改善のための手法として、ハードとソフトの両者の説示手法が求められている。ハードの部分では情報伝達具の新規作成や更新、ソフトの部分では解説やボランティアスタッフの育成などが挙げられる。これらの説示手法が行われ、博物館展示が博物館機能の中核の役割を果たし、教育形態としての効果を挙げれば、博物館そのものの社会教育機関としての位置づけを確固たるものとする事が出来るのである。博物館展示における説示型展示とは、来館者・観覧者への情報伝達という「展示機能」の枠に留まらず、博物館そのものの社会的位置づけをも担うものである。

（小島有紀子：博士課程後期史学専攻博物館学コース2年）

註

ⁱ 新井重三 1981「展示の形態と分類」『博物館学講座 第7巻』（榊雄山閣）

ⁱⁱ 青木豊 2003『博物館展示の研究』（榊雄山閣）

ⁱⁱⁱ 註2に同じ

^{iv} 青木豊 2006「学芸員養成科目としての「博物館展示論」の提唱」『全博協研究紀要』第9号

メディアとしての“漫画”の特性

漫画は文字と絵を組み合わせた表現手法であり、その解りやすさから老若男女を問わず支持されている。また、日本の漫画は幅広い年齢層を網羅する多種多様な作品があり、日本のみならず世界中で愛されている。最近では英語学習の為の英訳漫画なども存在する。英訳漫画は漫画を読みながら英語に触れるので、その英単語や表現がどのような場面で使われるのか、視覚から理解することが出来る。また、単調に単語や表現を覚えるよりも楽しみながらも深く理解し学ぶことが出来るのである。このように漫画は多少文字の意味が分からなくとも十分に理解することが可能なのである。

一般的に漫画は背景と何らかの行動をしている人物や動物が描かれ、その行動や状況を人物などが語るように吹き出しによって少量の文字が付される。この絵に加える少量の文字情報によって描かれている状況がより強く読者に伝わるのである。文字とグラフィック媒体の両方が揃い漫画となる。文字だけの情報では、受け手よっての認識が異なることがあり、その認識の相違が少なればよいが、僅かな言葉の表現で大きく意味が変わり認識されることも想定される。しかし、漫画では大まかな状況と意味が絵によって表現されているので、認識の相違は少なく、文字情報が表現されているものの意味を限定し、多くの読者に製作者が伝えたい内容を正しく伝えることが可能なのである。

また、文字だけの情報より注意を引くことも大きな特徴といえる。多くの読者はまず絵を見て、内容を読み始める。今日では売上増加を狙い文庫本の表紙を漫画の絵で飾るものも多いことから、漫画の絵の注目度の高さがよくわかる。漫画の絵は本の内容をより端的に伝えることが出来、その本だけでは興味のなかった人物に本を手に取りらせる力があるのである。

このような特性を持つ漫画を用いた情報伝達具は博物館展示に大きく貢献できる。博物館には多くの資料があり、その一つ一つにキャプションをつけ文字情報のみで伝えることは、利用者にとって苦痛になりかねない。まして、文字情報のみでは子どもに内容を伝えることは難しい。しかし、情報伝達具に漫画を取り入れることによって、展示された資料を一見するだけで一つ一つ文字を読むより簡単に情報伝達が出来上、難しい内容や文字が読めない子どもでも資料について理解できるのである。また、何もなければ通り過ぎてしまう小さな資料も漫画を使ったパネルを置くことで注意を喚起することが出来る。

漫画の特性である認識のずれの少ない情報伝達や、注意の喚起は博物館において有効であり、これからの博物館では漫画を使った情報伝達具が多く見られるようになるだろう。

漫画パネル・解説シート・ミュージアムワークシートの三種による情報伝達

加古川総合文化センターは複合施設であることから、利用者の年齢層は幅広い。漫画パネル・解説シート・ミュージアムワークシートなどの制作にあたり、対象年齢の設定が問題になった。そこで、加古川総合文化センターの周辺に小学校があること、小学生に理解できるものなら大人も理解できることなどから、小学生を対象とした漫画パネル・解説シート・ミュージアムワークシートを制作することになった。

漫画パネル・解説シート・ミュージアムワークシートの三種の展示方法として、まず入口にミュージアムワークシートを設える。ミュージアムワークシートには解説シートの絵柄と同じ男の子と女の子の絵をつけ、このキャラクターに吹き出しをつけ質問をしているように作成した。質問の順序も大まかに展示の順序になっており、展示を順序立てて見学しながらミュージアムワークシートの答えが導き出されるようになっている。

ミュージアムワークシートの答えになる展示には漫画の解説パネルをつけ、足を止めて見学するように工夫した。漫画パネルがつけられている資料は加古川の歴史を知る上で重要なものや珍しいものを厳選し、使用法や注意点などを絵に描く前にまとめ、それらを集約した絵を描くことを心がけた。また、その絵の吹き出しの文字情報は親しみやすく、理解しやすい事を第一に考え、可能な限り少なくし、重要な事だけに絞った。漫画パネルの側には解説シートを設置した。これは漫画パネルにより興味を持ち、大まかな意味を感じ取った子どもたちに、更に深い知識を得てもらうように漫画パネルでは表現しきれなかった内容を伝えるためのものである。こちらも可能な限り簡潔な文章を心がけ、漫画パネルと同様の絵を使い、描かれた人物が語りかけるように工夫した。

漫画パネル・解説シート・ミュージアムワークシートの三種の情報伝達具を使うことで、疑問を持ち、疑問を解くために展示室に向かい、発見をし、理解を深めるという一連の学習が可能になるのである。

(野中優子：博士課程後期史学専攻博物館学コース1年)



情報伝達の内容

三輪玉

三輪玉の出土は珍しく、当博物館の貴重な資料であるが、従来の展示では三輪玉が並べられているだけで、そこから使用方法や特徴を利用者が理解することは困難であった。一見するだけで三輪玉を理解できるように解説パネルと解説シートを作成した。

三輪玉は上面に大小のふくらみがあり、下面が平らになっている特殊な形をした玉である。この特殊な形状は三輪玉が太刀の勾皮につけられた装飾品であり、玉の溝に紐をかけて勾皮に縫じ付けられていたことに由来する。この形状の理由を理解できるよう工夫する必要があった。

まず、三輪玉が太刀の装飾であることや玉の形状と材質を説明し、さらに、三輪玉が勾皮に装着された図を用いて、玉がどのように勾皮にかけられていたかを視覚的に示した上で、文字による解説を付設した。解説パネルにも、解説シートで使用した図を用いて関連性をもたせ、三輪玉の形状にみられる特徴に注目した解説を意識した。

(大貫涼子：博士課程前期史学専攻博物館学コース2年)



ねずみ返し

ねずみ返しねずみかえしの解説シートでは、着目すべき情報として、①高床式倉庫とはなにか、②ねずみ返しねずみかえしの構造と機能の2点を選択し、対象者が博物館未経験者ということを念頭においた解説シートと解説パネルを作成した。

まず、解説パネルは高床式倉庫の全体図と、そこから拡大図としてねずみ返しねずみかえしの部分をクリックアップした絵を用いた。拡大図にはねずみねずみがひっくり返って落ちる様子を描くことで、その仕組み、役割の情景を絵に表し、文字情報を見ずとも一目でその仕組みが理解できるようにした。解説シートもパネル同様の絵を載せ、多量な文字情報はなるべく削除する方向で、解説文はできるだけ短いものにした。例えば高床式倉庫は、地面より高い場所に設置することで穀物の長期保存を目的としていたこと、また、ねずみねずみによる害を防備するための原始的な工夫がされていたこととの2点のみを取り上げて、簡単かつ的確に対象者に伝わることに留意して文章を作成した。

(渡邊亜祐香：博士課程前期史学専攻博物館学コース2年)



金環

金環は金メッキの技法解説に主眼を置き、解説シートの作成を行った。金メッキの技法は日常生活では使用することのない薬物である水銀が使用されているため、金属と薬物の特徴を先に示すことでより理解しやすいようにした。また、金を使用する点から有力者が権力を誇示するために身に付けていたものであるという説明を付し、死後の世界でも権力を誇示するために埋葬されたものが展示されている金環であることを示した。

解説パネルは使用方法を視覚的に理解してもらうことを目的として、女性の手を金環の後ろに持ってくるなど金環を強調する工夫を施した。現在、耳環と金環が同じ展示ケースに並べられているため、耳環と金環の区別がつきにくいので、台詞の中に「キラキラ」という語を入れることで金が使用されていることを意識してもらえるように配慮した。

(辻夏奈子：博士課程前期史学専攻博物館学コース2年)



イイダコツボ

加古川総合文化センターで展示されている「イイダコツボ」は、蛸壺漁に用いる道具である。蛸壺漁は、狭い場所に隠れるという蛸の習性を利用したもので、当該地域で盛んに行われていた、地域を知る上で貴重な資料である。また、この地域の蛸壺は上部に穴の開いた丸い形であるが、地域によっては波にさらわれないように蒲鉾型のものや鈴型のものがある。

これらの蛸壺に関する情報は、蛸壺のみを並べるだけの展示では伝わりにくいと考え、情報を捕捉するために蛸の絵を描いたパネルや漫画を用いた解説シートを用意した。

パネルによって、蛸の習性を明らかにし、イイダコツボを用いた蛸壺漁がその習性を利用した漁法であることを容易に理解できるよう工夫した。

解説シートの文章は、極力平易なものにし、4コマ漫画を用いることで蛸の習性や蛸壺漁法について、児童にもわかりやすい表現にすることを留意した。

(水谷円香：博士課程前期史学専攻博物館学コース2年)



處 (ハソウ)

ハソウは須恵器の中でも特徴的な形状を持つものであり、見た目から他の土器との違いを判断することは難しくない。しかし、かたちと名前はわかっていても、それが何に、どのように使っていたものであるのかが展示からでは正確に伝えられていないため、解説シートを作成し、展示の補助媒体とした。

解説シートによって伝えるべき情報は、ハソウがどのような資料であり、それがなぜ展示されているのか、ということであった。用途、方法については古墳時代を再現したイラストを作成し、登場人物のセリフとして説明を加えることで、具体的なイメージが浮かびやすくなるよう努めた。また、ハソウが展示されている理由については、加古川流域には多数の古墳が存在していることもあり、古くから権力を持った人物が存在していたということ、それに伴った海外との交流が行われていたことなどを踏まえ、特別な資料であると印象付けられるような文章とした。

(田島太良：博士課程前期史学専攻博物館学コース 2年)



博物館学専門・特殊実習の成果

本実習における情報伝達具の製作については以上であるが、まず、今回製作した情報伝達具が実際の展示室内でどのような効果を発揮するのかを追い、改善を行っていくことが今後の課題である。展示室内の見学及び説示手法を導入する展示の選定を行い、メディアとしての「漫画」の特質を最大限に発揮できるパネル・解説シート・ミュージアムワークシートの作成を行うことにより、実際の博物館運営に関わることが今回の情報伝達具製作実習の最大の成果である。

博物館活動の主翼である「展示」に必要な説示手法の形態は、それぞれの博物館の設立目的や展示の目的・意図によって異なることは言うまでもないが、本実習は「博物館展示の在り方」を考える良いきっかけであった。また、いくつもの方法や起こりうる可能性を考え、最も良い方法を選択し、常に改善を行っていくという作業方針は、学芸員としての職務のみならず、社会人としての職務に対する姿勢を学ぶこともできた。本実習では情報伝達具の製作のほかにも国内外インターンシップ（中国・韓国・学内・博物館関連企業・博物館など）、神社博物館構想に伴う神社資料調査や博物館設立構想に伴う民俗資料調査などの学外実習、資料台帳作成や資料の修復などの実践的な実習が行われている。博物館構想や実際の業務を学び本資料に直接接触の機会もあるなど、チームワークと個人の責任が伴う作業が多く、将来的な学芸員養成のための技術や心構えを身につけることが出来る授業となっている。

博物館学専門・特殊実習を含めたこのプログラムは、開始して1年しか経過していないが、すでに学芸員としての採用や大学及び大学院の博物館学非常勤講師着任の実績が決定しており、日本の大学院における博物館人材育成教育のモデルケースとなっている。本プログラムの目的であったように、博物館学に関する大学教育に携わるこ

とができる研究教育者、高度な博物館学の知識・技能を有する上級学芸員の養成の効果が現場と大学教育に波及することで、将来的に日本における博物館教育者・運営者の底上げを行うことができるといえる。

(小島有紀子：博士課程後期史学専攻博物館学コース 2年)



作業風景



完成した漫画パネル

おわりに

國學院大學の学芸員養成課程は、学部においてもそのカリキュラムは充実した内容であり、通年科目として 4 年次で実習を学ぶ。専門分野は異なるものの、博物館学意識の高い 6 名の教員が実習を担当する。この 1 年間で基本的な資料の取扱いと二次資料化の技術は修得するが、時間的に資料調査にまでは及ぶものではない。昨今の学生の傾向は、考古学専攻であっても発掘経験がないという、まさに机上の学問化が顕著となっているのが現状といえる。言うまでもなく博物館学は机上の学問であってはならないと考える。博物館学コースの研究生たちは、学部での基本的技術をさらに夏期学外実習に向けて、トレーニングを積んでいく。考古学を専攻した学生は実測を、カメラの技術に長けた学生は写真撮影を仲間に指導する。人に教えることが、自身の技術を向上させる最も効率の良い方法であることを学ぶのである。紙資料の修復訓練は、誰もが何時でも参加できる環境を設え、正麩糊の炊き方から刷毛の洗い方まで、また資料取扱いの作法も熟知し、調査後に借り受けた脆弱極まりない紙資料の修復も、資料のコンディションを考えつつ積極的に取り組み、技術を磨いていく。

夏期集中実習では資料のクリーニング、写場のセッティング、撮影、実測、台帳作成、資料の修復、報告書作成等、調査方法を一から学ぶ。学部では出来得なかった分野の充実を図り、来年度はそれらの展示に取り組む予定である。

(落合知子)